

ひとり暮らしの大森さん。

5年前、持病が悪化して、2か月入院しました。

退院の時、病院のソーシャルワーカーから、「さわやかサポートという高齢者の相談窓口があるから、何かあった時のために、一度行っておいた方がいいですよ。」と、担当のさわやかサポートの連絡先を渡されました。

『何かあった時のため…？』

大森さんは、自分のことは自分でできるし、今のところ持病も落ち着いている。もし悪くなればすぐに入院させてくれると先生から言われている。

はて…何かあった時のためと言われても、特に思いつかないな…

そう思いましたが、一応言われたとおりさわやかサポートへ一度行ってみることにしました。

「病院のソーシャルワーカーさんに紹介されて来たんですが…」

対応したさわやかサポート職員は、大森さんの名前・生年月日・連絡先・離れて暮らす家族の連絡先・病歴などを質問し、書き取っていました。

「今日うかがった事を記録として残して台帳登録しておくので、何かあったらまた来てくださいね。

『だから、何かあったらってというのが分からないのよね…』大森さんは思いました。

3か月後、大森さんの自宅に一通の書類が届きました。どうやら大田区から来た物で『高額医療費支給』と書いてある。入院の時払ったお金が戻るから、振込口座を書いて送り返すように、という事ようだ。

『でも、本当かな？払ったお金が戻るなんて上手い話があるのかな？振り込め詐欺とか最近聞くし…』大森さんは心配になりました。

その時ふと、3か月前に行ったさわやかサポートの事を思い出しました。

『こんな事でも相談にのってくれるのかな？』と思いましたが、書類を持って行ってみることにしました。

「私、この前一度来た大森です。ひとり暮らしなもんで、この書類ちょっと一緒に見て欲しくて…」

対応した職員は、「少々お待ち下さい」と言い、奥に戻って行きました。しばらくすると一冊の書類を持って戻ってきました。

「3か月前退院した時に来られていますね。」職員が手にしていたのは、3ヶ月前に大森さんが初めてさわやかサポートに来たとき、職員が書いていた書類でした。

大森さんは思いました。『こうやって私が言ったことを記録に残してあるんだなあ…』

「えーっと、この書類は…そうですね。ここに書いてある通り、入院していたときに支払った金額が、大森さんの限度額を超えていたので、戻ってくるんですよ」

「良かった。ホントなんですね。安心しました。」

「また何かあったら来てください。ところで最近体調はどうか？」

「大丈夫。調子いいですよ。」

「それは良かった。帰り道、気をつけてね。」

帰り道…大森さんは、『行く前はこんな事で行って良いのかと不安だったけど、行って良かったな』と思いました。



その後大森さんは、1年に1～2回、自宅に何か分からない書類が届くと、さわやかサポートに来て書き方を教えてもらい、持ち帰って自分で手続きをしていました。

今年4月、1年ぶりに大森さんがさわやかサポートにやってきました。

「これが来たんだけど…」

「こんにちは大森さん！久しぶり！！どれどれ見せて。」

「これ……」

「これは定額給付金のお知らせですね。知ってるでしょ、この前国会で支給が決まったの。」

「そうなの…？で、どうすればいいの？いくら払えばいいの？」

「違う違う！！払うんじゃないで、もらえるの(^^;)ここに振込先の口座記入して、あと、身分証明になる保険証かなんかのコピーと一緒に送るんですよ。それから印鑑も忘れないでね。」

「そうなの…？印鑑なんてついちゃって大丈夫？お金盗られちゃうんじゃない？払うなら現金で払いますよ～で、いくら？」

「だから、払うんじゃないで、国から大森さんがもらえるの。」

大森さんが1年ぶりにさわやかサポートにやってくるから数分。

対応していた職員は感じました。『今までの大森さんとは何か違う。もしかしたら認知症の症状かもしれない……』

「大森さん。家に持って帰って書くのも大変だから、今一緒に書きちゃいましょう。あと、その他に必要な書類は、もう一度大きく書いておきますね。それでポストに出せば大丈夫ですよ」

「そう……」

自信なさ気な返事をして、大森さんは帰って行きました。

翌日、大森さんが、またさわやかサポートにやって来ました。

「ちょっとこれみて欲しいんだけど……」

大森さんが差し出した物は、昨日職員と一緒にみた定額給付金の申請書でした。

「どうしました？」

「このメモはどういう事かしら……これと一緒に出すように書いてあるけど、これ出すとどうなるの？」

職員は思いました『昨日と同じ会話だ。やっぱり理解できていなかったのかあ……一緒に見てあげないと難しそうだな。良い機会だから、自宅へ行ってみよう。』

そして職員は大森さんに言いました。「色々揃えなきゃいけない書類もあるし、一度ご自宅に伺いますよ。」

「そう？悪いわね。お願いするわ。」

「じゃあ、明日10時に。」

「わかりました。」



翌日、職員は約束の時間に大森さん宅へ伺いました。

“ピンポン ”

「はーい」

ドアを開けた大森さんは、職員の顔を見た瞬間、きょと~んとした顔をし、次の瞬間、思い出したようでした。

「あれ？約束今日だったっけ！？忘れてたわ！ごめんなさい。散らかってるけどどうぞ！」

家の中はきれいに片付いていて、大森さんの几帳面な性格が表れているようでした。

大森さんと職員は一緒に必要な書類を揃えました。

「あとはポストに入れるだけだから、大森さんお願いしますね。」

「分かったわ。ありがとう。」

「ところで、最近は、体調とかいかがですか？」

「特に変わらないよ。週に3日ゲートボールに行ってるし、病院は月に1回、電車で行ってます。ゲートボールは疲れるけど、お友達が誘ってくれるから行ってるの。」

大森さんは、以前と全く変わらない生活をしているようです。家事をこなし、お友達との交流もあり、きちんと通院もしている。でも、包括職員は、明らかに違う部分を感じていました。そして『これまで同様の対応ではいけない』と感じていました。

大森さんの変化。確かに包括職員は高齢者福祉の専門家です。だから、気がついたのでしょうか？

そうではない気がします。

週に何回も会っているお友達もきっと、「あれっ！？」と思う瞬間があったのではないのでしょうか。そしてその方は、困っているお友達(大森さん)に、お友達として普通に手をさしのべていたはずです。

「お友達同士の助け合い」、「大森さんと専門職の関わり」

それぞれは、「大森さんのために」ということでは共通しています。しかしその中には、お友達にしかできないこと、専門職だからできることがあり、それらは、それぞれで、すでに自然に行っています。しかし、せっかく大森さんと関わっているのだから、どこかで連絡しあったり、協力しあったり、助け合えたら…きっと大森さんも、お友達も、専門職もみんなが良い方向に向かうのではないのでしょうか。まさに「三人寄れば〜」です!!!  
こんな大森さんのようなお友達、皆さんのまわりにもいませんか？皆さんは、その方の手助けを、自分1人で背負い込んでいませんか？

